



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

現地理解を通して子どもの主体性を育む「総合的な学習の時間」のあり方を求めて：
カンボジアの名産品“ココナッツ”を学習材とした
単元開発とその成果

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤中, 寛子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173911

現地理解を通して子どもの主体性を育む 「総合的な学習の時間」のあり方を求めて

～カンボジアの名産品“ココナッツ”を学習材とした単元開発とその成果～

前プノンベン日本人学校 教諭

兵庫県芦屋市立岩園小学校 教諭 藤 中 寛 子

キーワード：総合的な学習の時間、現地理解、言語活動の充実、体験的な活動、子ども主体

1. はじめに

縁あって、2015年度に新設されたカンボジア国内初のプノンベン日本人学校に派遣され、小学部を担任しながら中学部で国語を教える2年間を過ごした。中でも、2016年度小学部3年生での担任学級における総合的な学習の時間の教育実践「Discover! Frontier! Mamma Mia! ～魅力発見！カンボジア～ココナッツのひみつを見つけて、JSPP（プノンベン日本人学校）のみんなにフリーペーパーでつたえよう」は思い出深い。ここに、その概略を紹介する。

2. 単元の概略

（1）子どもの実態

カンボジアで生まれ育ち、日本人学校を除くと取り巻く生活・言語環境はまさにカンボジアがベースの子どもが2名、日本で生まれ育ち、初の海外生活となるカンボジアでも生活・言語環境は日本という子どもが2名の計4名の学だった。言語能力に注目すると、前者が母国語としての日本語能力そのものに課題があり、語彙が豊かではなかった。後者は、決まった言葉や言い回しに頼りがちで、自分の思いや考えを豊かに表現するまでに至っていなかった。課題解決に向かう姿勢に注目すると、ねばり強く思考して解決まで取り組む姿勢が十分に育っていないため、自分の意見を具体的で分かりやすい言葉で表し、自信を持って友達に伝えることができていなかった。自分の思いや考えを持つことができて、相手に伝わるように具体的な言葉にすることができずにいたのである。そのため、物事の表層・表面をなぞる程度の浅い思考にとどまっていた。

（2）教師の願い

以上のような子どもの実態から、担任として、授業者として子ども達に育みたい力を大別すると、「自分の思いや考えを豊かに表現することができる」「最後まであきらめずに課題の解決に取り組むことができる」「カンボジアに対する理解を深め、良さを見つけることができる」の3点になった。そこで、本実践では、自分以外の他者と通じ合うための表現活動を体験することで、関わりの中で生きていること・関わりの中だから生きられること・関わることの喜びを感じとらせたいと考えた。最後まであきらめずに課題解決に取り組むには、「こんなこともできる自分」という自分や自分の学びについて自己肯定感や自信を持つことが大切である。そのために、これまでの学習が（教科の枠を越えて）つながっていることを実感させ、友達と関わりながら課題の解決に臨むことで、学ぶ楽しさや喜びを感じ取らせたいと考えた。さらには、カンボジア理解につながる学習を通じて、カンボジアで生活している今の自分に幸せや喜びを少しでも感じてもらいたかったという思いもあった。

(3) カンボジアに対する理解を深めるために

子ども達が生き生きと学習する子ども主体の「総合的な学習の時間」にするために、子ども達との話し合いを重ねながら本単元の骨組みを立てていくことにした。最初の話し合いでは、キーワードとして「Discover」「Frontier」「Mamma Mia」の3つを提示した。「あまり知られていないようなもの・いちばん新しいもの・今までその魅力に気づかなかったもの（Frontier）を、発見したり調べて気づいたりして（Discover）、自分たちも含めたほかの人たちを驚かせる（Mamma Mia）総合的な学習の時間にしよう」というメッセージを端的に表すためである。キーワードを示したところで、せっかくカンボジアにあるプノンペン日本人学校で学習しているのだから、カンボジアらしさが感じられる課題を設定して総合にしようと子ども達に提案した。

(4) 体験的な活動を軸とした言語活動の充実を目指して

自分の思いや考えを豊かに表現することが課題であることから、体験的な活動を軸とした学習を通じて、豊かな表現力につながる語彙力の獲得・育成を図ろうとした。子ども達の興味関心にもとづき、五感を刺激する活動を設定し、体験することを通じて、実感を伴って自分の思いや考えを表現させたいからである。五感を刺激されると、言葉にするのが難しい感覚や感想が必ず生まれ、自分なりに工夫して表現し合うことになる。その際、お互いの表現に違いがあれば、それらを進んで埋め合せて、お互いの感覚や感想を共有し合う。子ども達の興味関心にもとづく体験活動だと、自然と意見交換が生まれ、お互いに影響し合える距離を保ちながら、最後まであきらめずに取り組むことができるはずである。

3つのキーワードの中の、「Frontier」と言えるようなカンボジア特産品・名産品について、子ども達とともに探していたとき、全校児童生徒でカンボジア伝統舞踊であるココナッツダンスに取り組んだ。その経験から、ココナッツボウルに子ども達が興味を持ったため、ココナッツを学習材として取り上げることにした。そこで、ココナッツ製品の販売店で見学したり店員さんにインタビューしたりすることで、どのようなココナッツ製品が売られているのか・売れているのかを知り、生活の中でココナッツがどのように根付いているのかを調べた。当初はココナッツボウルに興味を示した子ども達であったが、後に強い興味関心を示したのは、ココナッツオイルに対してであった。ココナッツオイルはココナッツの固形胚乳からできたもので、オイルをそのまま料理や美容に使うことができる。そのまま使うだけでなく、オイル配合の石鹸やバームも人気である。ココナッツオイルの万能性や、ココナッツがオイルを経てさらに姿を変えていることに、子ども達は注目した。そして、「自分たちでオイルを作ってみたい・使ってみたい」という声が上がったことから、ココナッツオイルに焦点を置き、オイルの手作りという体験活動を軸とした学習を組むことにした。実際、商品化されたココナッツオイルを初めて手に取って肌につけたとき、子ども達から「もちもちしてる」「べたべただよ」「でも、いやな感じのべたべたじゃない」「これが保湿だね」「しっとりしてるよ」といった感想が次々と上がった。中でも印象的だったのは、自分が感じた思いをうまく言葉にできなかった子どもが、友達が発した「もちもち」という言葉に共感を覚え、何度もオイルのついた手を頬に当てて「もちもちしてる」とつぶやきながら、その感覚や言葉の響きを確認していた場面である。

体験活動そのものだけで育むのではなく、体験活動を活用して表現・発信する活動も通じて、豊かな表現力を育もうとした。具体的には、本実践における子ども達にとってのゴール「フリーペーパーを発行して学校のみんなに伝えること」である。

(5) 自信をつけるために

「Frontier」探しの次に取り組んだのが、「Mamma Mia」をどうするかという話し合いである。授業者として、これまで各教科等で培ってきたさまざまな能力やスキル、知識を総動員する形で、オイル作りを通して分かったことや考えたことを発信させたいという思いがあった。体験活動を含めたこれまでの自分の学びや、学んできた自分自身に成長を感じ、自信を持ってほしかったからである。話し合いでは、以前取り組んだポップ作り

や新聞作り、本校の特集が組まれたフリーペーパーを思い浮かべた子ども達から、最終的にフリーペーパーを発行したいという考えが出てきた。そして、「ココナッツがこんなにたくさんの物に姿を変えて使われているなんて、みんな知らないはずだ」「ココナッツダンスを一緒に踊った学校のみんなに伝えたい」という思いから、「フリーペーパーを発行して学校のみんなに伝えること」を学習のまとめとする意見にまとまっていった。

(6) 単元全体の流れについて

以上のような経緯を踏まえ、本実践を3次構成の単元学習として設定した。まずは、第1次「ディスカバー・カンボジア～わたしたちの課題を見つけよう～」で単元全体の見通しを立てた。続く第2次「すがたをかえるココナッツ～ココナッツオイル作り～」で、五感を刺激するココナッツオイル作りという体験活動を軸とした学習に取り組んだ。そして、単元のまとめとなる第3次「ココナッツのひみつ教えます～フリーペーパー『DFM』^{ディー・エフ・エム}発行～」では、ココナッツオイル作りを通じて見つけた、ココナッツやオイル作りのひみつ（ひとつのココナッツからさまざまなものに姿を変えて昔から人々の生活の中に取りこまれていること・ココナッツからオイルを取り出すまでに大変な手間暇がかかること・オイルからさらに姿を変えて生活に利用することができること・カンボジアの人々にとってココナッツが身近な存在であることなど）を、フリーペーパー『DFM』を発行して学校のみんなに伝えるというこれまでの活動や学習を活用する形の学習に取り組んだ。

子ども達の見線から単元全体を見つめると、子ども達にとっては大きな課題が2つあった。1つ目は自分達で完成させるココナッツオイル作りで、2つ目はフリーペーパーの発行である。ココナッツオイル作りを手段としてフリーペーパー発行という目的の達成に取り組むという構図の単元学習とした。

3. 実際の取り組みの様子と成果

(1) 子ども主体で取り組むココナッツオイル作り体験活動

ココナッツ製品探しやココナッツジュースの試飲、ココナッツオイルの試し塗り等、商品化されたココナッツオイルに出会うことで、子ども達の興味関心が回を追って高まってきた。そこで、ココナッツオイルの手作りである。手作りのココナッツオイル完成を目指す体験活動は、子ども達にさらなる興味関心をもたらし、さらにそれを持続させることができた。自分達の力でオイルを完成させたとき、1つの課題を達成したという実感とともに、成し遂げた自分達に自信を持つことができたようである。また、子ども達がオイル作りで取り組んだ発酵分離法は、特別な道具や難しい作業をあまり必要としないため、自分達だけで作業に取り組むことができた。その一方、この方法だと、さまざまな条件が揃ったときにはじめてココナッツの固形胚乳からオイルが出てくるので、そこから不要物を取り除いて、純度の高いオイルを取り出すのも容易ではなかった。上澄みを取り除き、何度かろ過することで初めてオイルが完成する。このように、単純ながらも手間暇を必要とする発酵分離法は、失敗を伴う試行錯誤の過程を子ども達にもたらし、一体何が課題なのか、その課題をどう解決すればいいのか考えながら取り組まなければならない、しかもそれは一人の力だと難しい。必然として、友達と協力してオイル作りに臨まなければならないこと、協同的に最後まであきらめずに取り組む様子が見られた。

(2) 子ども達にとっての“ゴール”の意識づけ

オイルを作って終わっては、ただの体験になってしまう。それをふり返って整理し、発信することを通じて、体験したことが学びとして形成される。そこで、フリーペーパーを発行して学校のみんなにココナッツ



フリーペーパー『DFM』の表紙

のひみつを伝えるという（子ども達にとって）最終的なゴールを意識することで、オイル作りから新たな育ちや学びを期待した。最終的なゴールを意識しながら目の前のオイル作りに取り組むことは、子ども達の学習活動に必然性と連続性が生まれ、さらには主体性を育むことにもつながると考えたからである。単元を通して、このゴールを教室に掲示したり、活動の中で定期的に確認したり、発行までの道のりを子ども達自身が考えたりすることで、子ども達にゴールの意識付けを図った。初めてのオイル作りに失敗したとき、「このままだとフリーペーパーに載せる内容がオイル作り失敗になってしまう」「ココナッツがオイルに変身するひみつを伝えられない」「成功するまで続けなければフリーペーパーを発行する意味がない」といった言葉が聞かれた。実際、フリーペーパー発行の段階に入ると、地道な作業が長く続いたが、子ども達は最後まであきらめずに、楽しみながら取り組んだ。フリーペーパー発行の作業期間中、学習発表会があったため、フリーペーパーの宣伝もかねて、ココナッツオイルの作り方やオイルを使ったバームの作り方をチラシにして配ったり、それまでの取り組みから分かったココナッツにまつわる“ひみつ”をプレゼンしたりもした。学習発表会で取り上げたのも、子どもたちからの強い要望からである。

(3) 子ども達が得たもの

フリーペーパーの最後に掲載したふり返りには、子ども達が本実践を通して学んだことが表れていた。以下、その一部である。

「長くつづいたこの学習の中で、いろいろなことがありました。その中でほくは、オイル作りが一番心のこっています。オイル作りを通して分かったことは、役わり分たんの大切さです。役わり分たんをすると、オイル作りの作業が速くなるし、友だちときょう力することもひつようだと分かりました。また、道具を考えて工夫することも大切だと学びました（略）」

「ほくがココナッツ作りで学んだことは、2つあります。1つ目は、オイル作りのようなもの作りでは、道具を工夫すれば作業がスムーズになるということです。（略）ほくたち4人はたくさん話し合いをし、悪かった点やぎゃくによかった点を整理しました。そのとき、道具を工夫すればいいということに気がついたのです。2つ目はみんなで協力すればなんでもできるということです。道具を工夫して、みんなでDKJ（努力・協力・持久力）をはっきしたときに成こうしたことから、そう思うようになりました。（略）」

「ほくが、ココナッツオイル作りで学んだこと、それは、新しいことにチャレンジするとき、さい初からうまくいくとはかぎらないことです。（略）3回目ようやくせいこうしたとき、ほくは、「何事も、さい初からうまくいくわけではないんだなあ」と思いました。そのけいけんから、今では、何かに取り組んで失ばいしても「あっそうなんだ。そうすればいいんだ」と次につながられるようになり、DKJのJ（持久力）がつかしました。（略）」

「（略）何かを作るときには協力と役わり分たんも大切ということです。3回目のオイル作りがせいこうしたのは、道具のおかげだけではありません。友だちと協力し、それぞれの役わりをはたしたことも、せいこうした理由だと思います。（略）」

4. 終わりに

本教育実践を通して、ココナッツの周りに集まって話し合う4人の姿は、休み時間のよくある光景のひとつになった。ココナッツは子ども達にとって特別な存在となり、授業者が子ども達に育もうとした力までつけてくれた。本教育実践のために、たくさんの方々にご支援ご協力をいただいたことに改めて感謝しながら、終わりとしたい。



純度の高いオイルを取り出すための工夫について話し合っている様子